

## 現代の実体主義の諸相——実体の独立性をめぐる

加地 大介

### 1

分析形而上学の最近の動向として、「新アリストテレス的分析形而上学」とも言うべき、伝統的スタイルに近い形而上学研究の復興のようなものが少なくともその一部にはあるように思う。そしてそのひとつの形として、アリストテレスの形而上学において中心的位置を占めていた「実体(Substance)」の存在論的意義を再評価し、それを基礎的存在者として位置づける「実体主義(Substantialism)」、「実体存在論(Substance Ontology)」の復活傾向が挙げられる。本稿では、現代の代表的実体主義者たちが実体をどのように特徴づけ、どのような意味で存在論的に重視しているのかを比較検討しながら、彼らの各主張について一定の評価を試みることにする<sup>1</sup>。

私はまず、実体主義へのコミットメントの基準として次の三つを挙げたい：(1)「実体」を独立のカテゴリとして認定しているか。(2)「実体」に対してどの程度基礎的な位置づけを与えているか。(3)「実体」の実在性にどの程度コミットしているか。

第一の基準によって実体主義から排除されることになる代表的形而上学的立場としては、ホワイトヘッド(N. Whitehead)的過程(Process)存在論、クワイン(W. Quine)的四次元主義(Four-Dimensionalism)、デイヴィッドソン(D. Davidson)的できごと(Event)存在論、ルイス(D. Lewis)的ヒューム主義、アームストロング(D. Armstrong)的事態(State of Affairs)主義などが挙げられるだろう。さらに、実体をトロープ(Trope)の束に還元してしまうトロープ主義もその一つと言えるだろう<sup>2</sup>。次に、実体を独立のカテゴリとして認定しているという点では第一の基準を満たしているものの、第二の基準によってやや見劣りする実体主義的立場としては、マーティン(C. B. Martin)、ヘイル(J. Heil)の立場、ヨハンソン(I.

Johansson)の立場などが挙げられる。彼らに共通するのは、実体が属性とは峻別されるべきカテゴリーであることは強調しながらも、両者がいわば相互依存的な関係にあると見なすことである。別の見方をすれば、彼らは、より基礎的な何らかの存在者の二つのアスペクトとして実体と属性を位置づける、ダブル・アスペクト説を採用しているとも考えられる。

これらに対し、実体により基礎的な存在者としての位置づけを与えているのが、ホフマンとローゼン克蘭ツ(J. Hoffman and G. S. Rosenkranz)、スミス(B. Smith)、ロウ(E. J. Lowe)らである。彼らが実体を基礎的存在者とする主たる根拠は、実体は何らかの意味での「独立性」を持っているという点で、他のカテゴリーに対する特権的な位置にあるということである。これは、基本的にアリストテレスやデカルトによる次のような定義に沿った実体の捉え方であると言える<sup>3</sup>：「それだけで存在し得るものと存在し得ないものがある。前者が実体である。(Completed Works of Aristotle, 2: 1691)」「『実体』として私たちが理解するものは、その存在を他のいかなるものにも依存しない形で存在するようなもの以外にはあり得ない。(Philosophical Writings of Descartes, 2: 159)」

しかし、当然のことながらここで問題になってくるのは、その場合の「独立性」とはどのようなものなのか、そして、現代的観点からしてそのような基準を満たすものが果たして存在するのか、ということである。例えば、どのような物体もそれ以外の何らかの物体に対して因果的に依存しているはずであり、それだけで存在することはあり得ないのではないか、また、この場合問題になっている依存性が因果的な依存性ではなく存在論的な依存性だとしても、その物体の真部分となっている他の物体や、その属性、時空的位置などの他の種類の存在者に依存せざるをえないのではないか、という疑問が当然生ずるはずである。例えばソクラテスが仮に実体だとすると、ソクラテスという実体が存在するならば必然的にソクラテスの人生という過程の対象も存在するし、ソクラテスが存在した場所や時間も存在する。すなわちそれらはソクラテスという実体が存在するための必要条件であるはずなので、ソクラテスという実体が他のいかなる種類の存在者にも依存しないとは言えない。こうした問題に対処するため、実体の独立性に訴えることによって実体の基礎的性格を主張する上記の者たちは、独立性を厳密な形で再定義することになる。次には、その具

体的な形を見てみることにする。

## 2

### (1) スミス：境界占有性

スミスによる実体の定義の特徴は、個体、部分関係、存在論的必然性を基礎概念として、「実体的部分(Substantial Part)」「本質的部分(Essential Part)」「普遍的部分(Universal Part)」「境界的部分(Boundary Part)」などの種々の部分と「個別的依存性(Specific Dependence)」「類的依存性(Generic Dependence)」「境界的依存性(Boundary Dependence)」などの種々の存在論的依存性を定義しながら実体の定義を行っていくことにある。またその際、実体と偶有体(Accident) (= トロップ) から成る二種の個体と、実体的普遍と依存的普遍から成る二種の普遍とで構成される「四カテゴリー存在論(Four-Category Ontology)」と、普遍はそれを实例化する個体が少なくとも一つ存在するときのみ実在すると考える「内属的実在論(Immanent Realism)」という、アリストテレスの存在論の基本図式を採用している。

スミスによる実体の定義は次のとおりである<sup>4</sup>：

**(DS)**  $x$  は実体である。  $\equiv$ df (1) $x$  は実体的である。(2) $x$  は境界を持っている。(3) $x$  に境界依存していると同時に  $x$  から離散的な部分を持つ何らかの個体  $y$  にも境界依存しているような対象は存在しない。

この定義は、以下の定義を前提としている：

・  $x$  は  $y$  から離散している。(x is discrete from y.)  $\equiv$ df  $x$  と  $y$  は個体であり、共通の個体的部分を持っていない。

・  $x$  は  $y$  に個別的に依存している。(x is specifically dependent on y.)  $\equiv$ df (1) $x$  は  $y$  から離散している。(2) $x$  は必然的に、 $y$  が存在しなければ存在し得ないものである。

・  $x$  は実体的である。(x is substantial.)  $\equiv$ df (1) $x$  は原子的である。(2) $x$  はいかなる他の対象にも個別的に依存していない。

・  $x$  は  $y$  に境界依存している。(x is boundary dependent on y.)  $\equiv$ df (1) $x$  は  $y$  の個体的真部分である。(2) $x$  は必然的に、 $y$  が存在するか、または、 $x$  を真部分

として含む  $y$  の部分が存在するか、のどちらかであるようなものである。(3) $x$  の各個体的部分は、(2)の条件を満たす。

・  $x$  は境界である。(x is a boundary.)  $\equiv$ df  $x$  は何らかの個体に境界依存している。

大まかにまとめると、定義(DS)中の(1)は、まとまりを持つ独立の単位的個体であることを表している。「実体的」の定義中の「原子的」という条件を満たすものは、各実体的個体と各偶有的個体であるが、後者は内在性(Inherence)という個別的依存性を実体に対して有するので、個別的独立性の条件によって排除される。(2)(3)は、他の個体と共有されないような(完全な)境界を持つということを表す。この条件によって、例えば、ダリウスの腕は、その付け根部分の境界がダリウスの胴体によっても共有されることになるので、「実体的」ではあるが、「実体」とは言えないことになる。すなわちスミスの定義によれば、各生物は実体であるが、その非分離部分としての身体部分や内蔵などは「実体的」ではあっても実体ではない。

以上の実体の定義を踏まえてスミスはさらに、実体に内在する依存的個体としての偶有体、およびそれぞれの部分としての実体的普遍と偶有的普遍などを定義し、最終的に次のような原理を樹立する：

・ **存在論的有底性の原理(Principle of Ontological Well-Foundedness)**： 依存的対象が依存するものは、常に、一つまたは複数の独立的原子を部分として含むようなものである。

この場合の「独立的原子」とは結局実体のことであるので、彼はこの原理を次のようにも言い換えている：

・ **強い内属的實在論の法則(Strong Law of Immanent Realism)**： もしも何かが存在するならば、実体が存在する。

以上のようにしてスミスはまず、種々の存在論的依存性の中でも、実体が免れている依存性を、別の個体への依存によっても代替可能である「類的依存性」や必要条件に対する依存性などから峻別する。そして、それらより強い意味での依存性である、特定個体への依存性すなわち「個別的依存性」から免れていることとして実体の独立性を規定する。それに基づいて、一種のチーズの塊のようなものとしての世界から境界によって切り分けられた独立的個体としての

実体に対して、それ以外のすべての種類の存在者が内在性もしくは部分性のいづれかによって最終的には依存する、と主張する「組成的存在論(Constituent Ontology)」の中核に実体を位置づけることになるのである。

## (2) ホフマンとローゼンクランツ：同種内独立性

ホフマンとローゼンクランツ（以下では‘H&R’<sup>5</sup>と略称）は、スミス（およびおそらくアリストテレス）のように、最終的に実体に対する個別的依存性を持たざるを得ないということによって属性などの他のカテゴリーを実体と対比させることはせず、むしろ同じカテゴリーに属する他の個体からの独立性こそが、実体にまつわるいくつかの独立性のなかでも最も重要なものだと考える。彼らはまず、十の代表的な存在論的カテゴリーから成るリストとして、次のような「リスト L」を規定する<sup>5</sup>：「リスト L： 属性(Property)、関係(Relation)、命題(Proposition)、できごと、時間(Time)、場所(Place)、境界(Limit)、集積体(Collection)、欠如体(Privation)、トローブ」

また、カテゴリー間の包摂関係を次のように定義する：

・カテゴリーFはカテゴリーGを包摂する。(A category being an F subsumes a category being an G.) ≡df (1)必然的に、GであるものはFである。かつ、(2)FであるがGではないものが存在し得る。

そのうえで、リスト L 中の代表的カテゴリーと同じレベルの一般性を持つカテゴリーとしての「レベル C カテゴリー」を次のように定義する：

・カテゴリーC1はレベルCのものである。(A category C1 is at level C.) ≡df 次のいづれかが成立する： (1)C1はリストL上にあり、かつ、C1は実例化可能(instantiable)である。(2)[(a) C1はL上になく、C1はL内の実例化可能なカテゴリーを包摂することはなく、L上のいかなるカテゴリーもC1を包摂することはない。かつ、(b) (2)(a)に現れているような条件を満たすと同時にC1を包摂するカテゴリーC2は存在しない。]

そして、いまの定義における(2)の条件を満たすという理由により、実体をレベル C カテゴリーのひとつとして位置づける。そのうえで彼らは、他のレベル C カテゴリーとの比較を通して、実体というカテゴリーの特質を追究した。その結果として彼らが着目したのが、次の定義によるところの「同種内独立性

(Independence-within-its-Kind)』である：「次のようなことが可能である：ある期間  $t$  を通して、カテゴリ  $C1$  の実例である対象  $x$  が存在し、その期間  $t$  において  $C1$  の実例であるいかなる対象  $y$  についても、その  $y$  は  $x$  と同一である。」

そして最終的に、同種内独立性を中心とした「独立の実例を持ち得る」という性質を次のように定義し、そのような性質を持つカテゴリとして実体というカテゴリを規定した<sup>6</sup>：

**(DH1)** レベル  $C$  カテゴリ  $C1$  は、独立の実例を持ち得る。(A level  $C$  category  $C1$  is *capable-of-having-an-independent-instance*.)  $\equiv$ df 次がいずれも成立する：

(1)  $C1$  は同種内独立的である。(2) 次のような対象  $z$  が存在し得る： $z$  は  $C1$  の実例である。かつ、同種内独立的であるような、 $C1$  とは異なるレベル  $C$  のカテゴリ  $C2$  の実例である対象は存在しない。(3) 次のような対象  $x, y$  は存在し得ない： $x$  はカテゴリ  $C1$  の実例であり、かつ、 $y$  は  $x$  の部分であり、かつ、 $y$  は  $C1$  とは異なる（その真部分と同等なカテゴリ以外の）レベル  $C$  カテゴリの実例である。

**(DH2)**  $x$  は実体である。  $\equiv$ df  $x$  は独立の実例を持ち得るレベル  $C$  カテゴリの実例である。

H&R によれば、定義(DH1)中の(1)の同種内独立性によって、リスト  $L$  上の十のレベル  $C$  カテゴリのうち、集積体と欠如体以外の八つのカテゴリが排除される。(2)は、同種内独立性を持つ他のレベル  $C$  カテゴリからの独立性を表すが、欠如体やできごととは必ず実体を必要とすると考えるならば、この条件(2)によってそれらが排除される。しかしそれが認められない場合、できごとは(1)によって排除されるが欠如体はされないし、集積体もまだ残っている。そこで、これら二つのカテゴリを排除するために(3)が付加される。(3)は、部分に関する他のレベル  $C$  カテゴリからの独立性である。彼らは、例えば穴という欠如体は場所という異なるカテゴリに属する部分を持ち、また砂山という集積体は砂粒という実体を部分として持つという理由により、いずれもこの条件を満たさないと主張している。

結局のところ H&R は、同種内独立性を中心とした「独立の実例を持ち得る」という性質に、実体というカテゴリの独自性を求めたと言える。彼らによれば、(個体としての) 実体であるとは、そのような独特のカテゴリの実例であ

ということなのである。

### (3) ロウ：本質独立性

ロウは、四カテゴリー存在論および内属的実在論を採用する点で、スミスと共通している。そしてロウが着目する実体の独立性も、スミスと同様の個別的依存性である。しかし、スミスがその定義において「 $x$ は必然的に、 $y$ が存在しなければ存在し得ないものである」という存在論的依存性を表す条件をそれ以上分析しないで用いていたのに対し、ロウの場合は、そもそもその際の実在論的依存性がいかなる意味であるのかを明示化しようとするところに彼の実体論の特徴がある<sup>7</sup>。

彼はまず、暫定的に実体を次のように定義する：

**(DL)**  $x$  は実体である。  $\equiv$ df (1) $x$  は個体である。かつ、(2)次のような個体  $y$  は存在しない：  $y$  は  $x$  と同一ではなく、かつ、 $x$  はその存在を  $y$  に依存している。

さらに、この定義中における「 $x$  はその存在を  $y$  に依存している」を次のように定義する：

・  $x$  はその存在を  $y$  に依存している。 ( $x$  depends for its existence upon  $y$ .)  $\equiv$ df 必然的に、 $x$  の同一性は  $y$  の同一性に依存している。

結果としてロウは、実体に関して成立する次のような定理を得たことになる：

**(TL1)**  $x$  は実体である。 iff (1) $x$  は個体である。かつ、(2)次のような個体  $y$  は存在しない：  $y$  は  $x$  と同一ではなく、かつ、 $x$  はその同一性を  $y$  の同一性に依存している。

しかしすると今度は、「同一性を依存する」ということの意味が問われねばならない。そこで彼は、同一性の依存性が成立することの必要条件として次のような「関数(Function)」の必然的存在を挙げる：

**(TL2)** もしも  $x$  の同一性が  $y$  の同一性に依存しているならば、必然的に次のような関数  $F$  が存在する：  $x$  は  $y$  の  $F$  と必然的に同一である。

例えば、暗殺というできごとの同一性は、(少なくとも部分的には) 暗殺された人物の同一性に依存するため、特定の暗殺  $x$  に対して「人物  $y$  の暗殺」と

いう関数  $F$  が存在する。しかしこの条件は、同一性の依存の必要条件ではあっても十分条件とは言えない。というのも、例えば、 $x$  の同一性は  $x$  を唯一の要素とする集合（シングルトン） $\{x\}$  の同一性に依存しないにもかかわらず、「必然的に、 $x$  はシングルトン $\{x\}$ の唯一の要素と同一である」という命題が成立してしまうからである。

そこで彼は、最終的に「本質(Essence)」という概念を用いて同一性の依存性を次のように定義する：

・ $x$  の同一性は  $y$  の同一性に依存している。(The identity of  $x$  depends on the identity of  $y$ .)  $\equiv$ df 必然的に、次のような関数  $F$  が存在する： $x$  は  $y$  の  $F$  であるということは、 $x$  の本質の一部である。

こうすれば、「シングルトン $\{x\}$ の唯一の要素」であるということが  $x$  の本質の一部であるとは考えられないので、 $x$  が  $\{x\}$  にその同一性を依存するとは言えなくなる。結局のところ、この定義における関数  $F$  は、 $x$  の属する種の同一性基準によって供給されるものだと考えられる。例えば集合の場合は、外延性の公理(Axiom of Extensionality)がその同一性基準を規定しているので、 $a, b, c$  という三つの要素から成る集合  $S$  は、「 $a, b, c$  (のみ) を要素とするもの」であるということがその本質の一部であることになる。したがって集合  $S$  は要素  $a, b, c$  に同一性を依存しているので実体とは言えない。これに対し、もしも  $a, b, c$  がいずれも例えば生物的個体や人物であるとすれば、(少なくとも日常的存在論のもとでは) それらは実体であることになる。このようにしてロウは、実体の特徴としての独立性を、当該の実体が属する種の本質を規定する同一性基準において他の特定の個体が関与する余地がないこととして、解釈したのである。

### 3

以上、スミス、H&R、ロウという三者がそれぞれ独自の形で実体の独立性を定義していることを見たが、改めて彼らの相違の意味について考えてみよう。

スミスとロウは、伝統的にアリストテレスが主張したと考えられてきた意味での存在論的依存性を基本的に守ったうえで、その際の依存性を「個別的依存性」としてより強い限定を加えることによって、例えばソクラテスの人生はソ



クラテスに個別的に依存するけれどもその逆は成立しないと主張することを可能にする。そのうえで、では個別的依存性とは何か？という点については、スミスはそれ以上解明しないで境界の占有性という別の条件を実体に付与しているのに対し、ロウは存在論的依存性の意味をさらに解明していると考えられる。これに対し H&R は、独立性が実体の特徴であるとする点ではアリストテレスに沿いつつも、その独立性の意味については、彼らが自認するとおり、「同種内独立性」という「新たな」概念を提示する。そして、そのような独立性をもつことが可能な独特のカテゴリーとして実体というカテゴリーを他のカテゴリーから峻別し、本来的に非関係的に存在し得る持続的個体として個々の実体の特徴づけている。

スミスとロウは、四カテゴリー存在論および内属的実在論を共有しているという点でも親近性が高いが、それぞれにおける実体の同一性基準がまったく異なっている。スミスは必ずしも同一性について詳細な説明を行っていないが、彼は部分関係と存在論的必然性を用いて境界を定義したうえで、占有する境界の同一性によって実体の同一性基準を与えているように思われる。これに対しロウは、個体が属する種の本質がその個体の同一性基準を与えたとしたうえで、その本質を他の個体に依存しないことをもって実体の条件としている。これは、スミスとロウが、四カテゴリー存在論は共有しながらも、その縦の関係すなわち個体と普遍の関係の解釈において異なっていることを示している。一言で言えば、スミスが個体レベルでの部分関係によって実体を個別化するのに対し、ロウは本質を与える同一性基準によって実体を個別化しているということであり、さらに抽象化していえば、それは実体の素材としての質料レベルで同一性基準を与えるか、実体の本質としての形相レベルで同一性基準を与えるかという相違である。すなわち、世界を最も根本的レベルで切り分けている基礎的存在者として実体を位置づける点において両者は共通しながら、その切り分けがなされる仕方に関して質料主導型と形相主導型という対立を見せていると言える。

こうした対立は、例えばスミスによる次のような記述と、実体に関してロウにきわめて近い立場を採っているラックスによるその次の記述を比較してみると、よくわかる：

「…種々の種類の实在の切り分け方(Parsing)、分節化(Articulation)が存在する。最初のそして最も重要なタイプの切り分けは、实在の第一の継ぎ目(Joint)である実体の外的境界に我々が従うときに帰結する。それらは、もの自体における境界、我々の側での分節化の行為が一切存在しなくとも存在するような類の境界なのである<sup>8</sup>。」

「具体的対象が属するところの諸々の種(Kinds)は、存在論的な「クッキー・カッター(Cookie Cutters)」である。それらの種は世界を徘徊し、いわば、その実例であるところの別々の個体へと世界を分割していく。種は世界を個々の人間、個々の犬、個々の樫の木等々へと切り分ける。その結果として、種は私たちに対象を同定し、区別し、数えるための原理を与えてくれるのである<sup>9</sup>。」

こうした両者の相違がもたらすひとつの存在論的帰結は、実体の存在のために、スミスは「境界」の存在に、ロウは「本質」の存在に、それぞれコミットすることになるということである。これは結果的に、スミスの場合、占有的な境界が無い限り実体とは認められないということにより、どちらかと言えば実体を限定していく方向にそれが働くのに対し、逆にロウの場合は、本質に関する個別的独立性さえ確保できれば実体と認められることにより、どちらかと言えば実体を拡張していく方向に働くことになる。例えば、スミスは先にも述べたとおり、(アリストテレスと同様) 生命体の真部分としての(分離されていない)内蔵や複合的な人工物は実体とは認めないのに対し、ロウはいずれをも実体と認める。

定義としての条件は、おそらく H&R のものがもっとも満たしている。というのも、彼らが提示した「同種内独立性」という実体の必要条件自体は弱いものであるが、他のカテゴリーをも実体とは異なる形で特徴づけることによって反例を排除しているため、合わせると結果的に十分条件にもなるという構造を彼らの定義はもっているからである。これに対しスミスは、上述の定義が必ずしも十分なものではなく、実体の耐時性や統一性に関しては配慮していないことを認めているし(註4参照)、ロウの定義についても、例えば空集合や個々の命題などもそれに当てはまってしまうことがホフマンによって指摘されている<sup>10</sup>。

しかし H&R の定義によると、実体というカテゴリーが、他のカテゴリーに

は見られない独特の性質を持つという点できわめて「特殊」であるということ  
は言えても、必ずしも「基礎的な」カテゴリーであるということにはならない  
ように思われる（彼らにとってはそれで十分なかもしれないが）。ただ、同類  
の他の個体を一切必要としないで一定期間存在し得るという意味での「孤独に  
耐え得る個体」「単独者たり得る個体」としての実体という特徴づけには、何か  
意外な盲点を突く独特の趣がある。そのような特徴づけは、例えば「実体とし  
ての神」や「単独者としての我」などを擁護したいと考える神学的、実存主義  
的な実体論者にとっては魅力的に映るかもしれない。

実体というものを実在的・客観的な存在者として位置づけるという点につい  
ては、スミスが最も明確かつ強力であろう。しかし、ロウと比較したとき「存  
在論的依存性」の意味は未解明であり、また、中間サイズの対象についてはと  
もかく、「境界」を用いた実体の定義がどれほどマイクロ・マクロの対象に適用で  
きるのか、等について不明である。そして私自身が特に不満を感じるのは、ス  
ミスの定義では、そもそもなぜ実体が「本質的部分」なるものを持たねばなら  
ないのか、という点について説得的な説明を与えられるようには思えないとい  
うことである。このことは、彼による次のような「本質的部分」の定義を見る  
とよくわかる<sup>11</sup>：

・ $x$  は原子  $y$  の本質的部分である。(x is an essential part of atom y.)  $\equiv$ df 次がい  
ずれも成立する： (1) $x$  は  $y$  の個体的真部分である。(2) $x$  のいかなる部分も、  
実体的でも偶有的でも境界でもない。(3) $y$  は必然的に、 $x$  が存在しなければ存  
在できないようなものである。

すなわちこの定義では、(3)によって本質的部分の不可欠性は主張されている  
ものの、その根拠となるべき内容的定義は積極的には述べられておらず、(2)に  
よって「実体的でも偶有的でも境界でもない」という消去法によってしか規定  
されていないのである。

これに対しロウによる定義は、実体の「本質」を中心に据えたことによって、  
実体の個別的独立性に関する説明力や、その定義の適用の柔軟性においてスミ  
スよりも勝っていると思われる。しかしその結果、種およびその本質というも  
のにどれほど客観性・実在性を持たせ得るのか、また、種や本質というものを  
どれほど明確化できるか、などの点において、さらに果たすべき存在論的作業

をスミスよりも多く抱えることになるであろう<sup>12</sup>。

## 註

- <sup>1</sup> 言うまでもなく、実体を特徴づけるすべての側面について限られた紙幅で十分に議論することはできない。特に実体の耐時性(endurance)や(広い意味での)原因性(causality)に関する諸問題については本稿ではほとんど触れられず、実体の統一性(unity)の取り扱いもごく僅かである。
- <sup>2</sup> 「トロープ」とは、具体的個体としての属性、例えばソクラテスの知恵、個別的な赤色などを表す。
- <sup>3</sup> いずれも[Hoffman and Rosenkranz 1994](p. 53)から再引用した。
- <sup>4</sup> [Smith 1997] なおスミスが想定しているのは、基本的に中間サイズの日常的对象としての実体である。またスミスの分析は実体の十分条件を提示するものではなく、実体の「動的で自己維持的(dynamic, self-sustaining)な特徴」は考慮されていないことを彼は認めている。
- <sup>5</sup> [Hoffman and Rosenkranz 1994] リストLの中に登場する「欠如体」は、物体の欠如としての穴や音の欠如としての静寂など、具体的対象としての欠如を指す。また「集積体」は、やはり具体的対象としての材木の束や砂の集積としての砂山などであり、抽象的な対象としての「集合」とは区別される。
- <sup>6</sup> 彼らは実体の定義として二つのバージョンを提示しているが、そのうちのより簡潔な方を選んだ。またこの論文に合わせて表現法を少し修正してある。
- <sup>7</sup> [Lowe 1998] (特に第六章)
- <sup>8</sup> [Smith 1997]
- <sup>9</sup> [Loux 1998] p. 123.
- <sup>10</sup> [Hoffman 2006]
- <sup>11</sup> [Smith 1997]
- <sup>12</sup> ラックスは、種や本質は、もはやそれ以上還元的説明を与えることのできない「存在の還元不可能な統一的存在あり方(an Irreducibly Unified Way of Being)」であると考え、それゆえにこそ、それらは「個別化する普遍(Individuating Universal)」として機能し、その実例であるところの実体を基礎的存在者たらしめるのだと主張している ([Loux 1998] p. 121)。ロウも、「本質」というものを必然的属性のような特定の存在者と同一視すべきではなく、「それが何であるか」を示すものだという点を強調しているが、その内実の詳細については必ずしも十分に説明しているとは言えない。

## 参考文献

- [Heil, J. 2003] *From an Ontological Point of View*, Oxford University Press.
- [Hoffman, J. 2006] “Lowe on Substance”, Conference “The Metaphysics of E. J. Lowe”, unpublished.
- [Hoffman, J. and G. S. Rosenkranz 1994] *Substance among Other Categories*, Cambridge

University Press.

[Hoffman, J. and G. S. Rosenkranz 1997] *Substance: Its Nature and Existence*, Routledge.

[Johansson, I. 1989] *Ontological Investigations. An Inquiry into the Categories of Nature, Man and Society*, Routledge.

[Loux, M. J. 1998] *Metaphysics: A Contemporary Introduction*, Routledge.

[Lowe, E. J. 1998] *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Oxford University Press.

[Lowe, E. J. 2006] *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*, Oxford University Press.

[Martin, C. B. 1980] "Substance Substantiated", *Australasian Journal of Philosophy*, 58-1, pp. 3-10.

[Smith, B. 1997] "On Substances, Accidents and Universals: In Defence of a Constituent Ontology", *Philosophical Papers*, pp. 105-127.

(かち だいすけ／埼玉大学)